

『唐子西文録』 訳注稿 (上)

大島 絵 莉 香
矢 田 博 士

〔解題〕

『唐子西文録』は、唐庚（字は子西）が先人の詩文について論評した言葉を、強幼安（字は行父）が書き記したもので、全部で三十五条からなる。

唐庚は、眉州丹稜（四川省）の人。北宋・哲宗の紹聖元年（一〇九四）の進士。宰相の張商英に抜擢されたが、蔡京との権力争いに敗れた張商英が宰相を罷免されるに伴い、惠州（広東省）に貶謫される。ちなみに惠州は、同郷の先輩文人にあたる蘇軾が貶謫された地でもあった。その後、徽宗の政和七年（一一一七）に承議郎として中央に復帰するものの、自ら宮祠（提挙上清太平宮）を願い出て、徽宗の宣和三年（一

一二二）に故郷の蜀（四川省）に帰ることとなった。しかしながら、赴任の途中、鳳翔（陝西省）に差し掛かった折りに亡くなった。享年五十一歳であった。『宋史』巻四四三に伝があり、詩は『全宋詩』巻一三二〇から巻一三二六（第二十三冊）に収められている。

強幼安が『唐子西文録』を書き記した経緯については、序文に相当する彼の「唐子西文録記」に詳しい。そこで以下、まずその訳注を掲げること、解題に代えることとする。そしてさらにそれに続けて、本稿では『唐子西文録』全三十五条のうちの第十六条までの訳注を掲げる。

〔凡例〕

◇ テキストは、清・何文煥輯『歴代詩話』（中華書局、一九八一年四月第一版）を底本とした。

◇ 底本で校異が示されている部分については、原文に
〔校〕と付してその箇所を示し、〔校異〕の項目を設けて
訳出した。

◇ 【訓読】の項目の書き下し文については、漢字の読み
（ルビ）は現代仮名遣いを、送り仮名は旧仮名遣いを用
いた。

宣和元年、行父自錢塘罷官如京師。眉山唐先生同寓于城東
景德僧舍。與同郡關注子東日從之遊、實聞所未聞。退而記其
論文之語、得數紙以歸。自己亥九月十三日盡明年正月六日而
別。先生北歸還朝、得請宮祠歸瀘南、道卒於鳳翔。年五十一。
自己亥距今紹興八年戊午、二十年矣。舊所記、更兵火無復
存者。子東書來、屬余追錄、且欲得僕自書、云「將置之隅坐、
如見師友」。衰病廢忘、十不省五六、乃爲書所記、得三十五條。

先生嘗次韻行父「冬日旅舍」詩、

殘歲無多日、此身猶旅人。

客情安枕少、天色舉盃頻。

桂玉黃金盡、風塵白髮新。

異鄉梅信遠、誰寄一枝春。

又次「留別」韻云、

白頭重踏軟紅塵、獨立鸞行覺異倫。

往事已空誰敘舊、好詩乍見且嘗新。

細思寂寂門羅雀、猶勝纍纍冢臥麟。

力請宮祠知意否、漸謀歸老錦江濱。

蓋絕筆于是矣。集者逸之、故並記云。三月癸巳、餘杭強行
父幼安記。

【訓読】

宣和元年、行父 錢塘より官を罷めて京師に如く。眉山の
唐先生 同に城東の景德僧舍に寓す。同郡の關注子東と日々
之れに従ひて遊び、實に未だ聞かざる所を聞く。退きて其の
文を論ずるの語を記し、數紙を得て以つて歸る。己亥九月十
三日より明年正月六日を盡くして別る。先生 北のかた歸り
て朝に還るや、宮祠を請ひて瀘南に歸るを得たるも、道すが
ら鳳翔に卒す。年五十一。

己亥より今紹興八年戊午を距つること、二十年なり。舊と記す所、兵火を更て復た存する者無し。子東の書來たり、余に屬して追録せしめ、且つ僕の自ら書するを得んと欲し、「將に之れを隅坐に置きて、師友を見るが如くせんとす」と云ふ。衰病廢忘し、十に五六も省（しょうぶつか）にせず、乃ち爲に記す所を書し、三十五條を得たり。

先生 嘗て行父の「冬日の旅舎」詩に次韻していふ。

殘歲 日多きこと無きも

此の身は猶ほ旅人なり

客情 枕に安んずること少なく

天色 盃を擧ぐることに頻りなり

桂玉 黄金 盡き

風塵 白髮 新たなり

異郷 梅信 遠し

誰か寄せん 一枝の春を

又た「留別」の韻に次して云ふ。

白頭 重ねて踏めば 紅塵 軟らかなり

獨り駕行に立てば 異倫を覺ゆ

往事 已に空しければ 誰か舊を紋べんや

好詩 乍ち見れば 且らく新を嘗（こころ）みる

細やかに思ふ 寂寂たる門に羅なる雀の

猶ほ纍纍たる家に臥す麟に勝るを

力めて宮祠を請ふ 意を知るや否や

漸く歸老を謀る 錦江の濱

蓋し筆を是に絶つならん。集むる者 之れを逸すれば、

故（こゝ）に云に並記す。三月癸巳、餘杭の強行父幼安 記す。

【語釈】

※景德僧舎：北宋の都・開封の城東にあつた僧侶の居所。一般に宿

泊施設としても開放されていたのである。『事實類苑』卷四

十三「警隅子」には、北宋・仁宗の慶曆年間（一〇四一〜一

〇四八）、開封に遊学していた建安（福建省）出身の黄晞（自

ら警隅子と号す）が景德僧舎で亡くなったことを記す。

※關注子東：関注、字は子東のこと。錢塘（浙江省）の人。南宋・

高宗の紹興五年（一一三五）の進士。詩は『全宋詩』卷一八

三五（第三十二冊）に四首を収める。

※己亥：北宋・徽宗の宣和元年（一一一九）を干支で表したもの。

※宮祠：官名。もとは道教を崇奉するために設けられた。実職はな

く、主に隱居を願う者に授けられた。唐庚が自ら提挙上清太

平宮を願い出たことを言う。

※「枝春」：「贈范曄（范曄に贈る）」という題で陸凱の作として伝

わる詩に、——折梅逢驛使、寄與隴頭人、江南無所有、聊贈一枝春（梅を折りて驛使に逢ひ、隴頭の人に寄せ與ふ、江南有所無し、聊か贈る 一枝の春）——と歌うのを踏まえる。北方の都にいる私には、南方の故郷の蜀の地から梅の一枝を届けてくれる人がいないことを言う。

※紅塵：都大路を舞う塵。

※駕行：中央の高官たちが居並ぶこと。

※「細思」の二句：「寂寂門羅雀」は、寂しげな家の門に並ぶ雀たち。故郷に隠居した時の質素であっても自由な状況を比喩するであろう。「曇曇冢臥麟」は、重なり合うように連なる墓の前に置かれた麒麟の石像。厳かさの一方で束縛される朝廷での出仕の状況を比喩するであろう。

※「漸謀」の句：「歸老」は、生涯を終えること。「錦江」は、蜀（四川省）を流れる岷江の支流。その名は、かつての蜀が錦の産地として名高く、人々がこの川で錦を洗ったことに由来する。

【通釈】

北宋・徽宗の宣和元年（一一一九）、わたくし行父（強幼安の字）は、錢塘（浙江省杭州市）から官をやめて都・開封に行った。城東にある景德僧舎に眉山出身の唐先生（唐庚、字は子西）がともに宿泊していた。そこで同郡の関子東（名は注、子東はその字、錢塘の人）と毎日先生のもとを訪れ交流を結び、実に今まで耳にしたことのない貴重な話を聞かせていただいた。退散して先生が詩文について論じられた言葉を記録し、数枚に及ぶ言葉を得て故郷に帰った。唐先生とのおつきあいは、己亥の年すなわち宣和元年（一一一九）九月十三日から翌年の正月六日にまで及んで、お別れしたのだ。（惠州に貶謫されていた）唐先生は北に帰ることが許され、（承議郎として）朝廷に戻ると、提挙上清太平宮という閑職を願い出て、（出身地に近い）瀘州の南部への赴任を許された。しかしながら、途中、鳳翔に立ち寄ったところで亡くなってしまった。享年五十一歳であった。

己亥の年すなわち宣和元年（一一一九）から、今年すなわち南宋・高宗の紹興八年戊午（一一三八）までは、二十年の隔たりがある。当時の記録などは、靖康の変の戦火を経てまったく存在していない。そんな折り、関子東から手紙が届き、

唐先生の生前の功績を私に書くよう依頼し、そのうえ私が自ら書き記した唐先生の言葉がほしいとのこと、「それを席座のそばに置いて、常に師友に会っているかのようにしたいのだ」と言ってきた。衰えと物忘れがひどく、十のうち五ないし六ははっきりと覚えていなかったが、しかたなく関子東のために覚えていることを書き記したところ、三十五条となった。

唐先生はかつてわたくし行父の「冬日の旅舎」詩に次韻して、次のように歌った。

年も暮れゆき、残す日もわずかとなったが、この身は
なおも旅人のままだ。

旅人の心情は常に不安で、枕に頭を落ち着かせて眠る
ことも少ない。冬の寂しげな空を見ては、憂いを忘れよ
うとしきりに杯を手にして酒を飲む。

桂の木が生えるという月は欠け、黄金の輝きはまさに
消えつつあり、北風に舞う塵の中、私の白髪は新たにそ
の数を増やすのだ。

異郷にあれば、梅の便りも疎遠である。この私にいつ
たい誰が一枝の春の心遣いを寄せてくれるであろうか。

また、さらにわたしの「留別」詩に次韻して、次のように
歌った。

白髪の身で再びやわらかな都大路の塵を踏むことが出
来た。居並ぶ高官の中に立ってみると、ただ独り場違い
なところにいる感じがした。

かつて都にいた時のことはすでに空しく、当時のこと
を述べる者もない。すばらしいあなたの詩を目にして、
私もひとまず新しい詩を作ってみた。

仔細に思いめぐらすことは、寂しげな家の門に並ぶ雀
たちの方が、重なり合うように連なる墓の前に倒れ伏す
麒麟の石像よりも、まだましだということ。

自ら宮祠という閑職を希望した私の気持ちをお分かり
であろうか。錦江のほとりで生涯を終える支度を徐々に
しているのだ。

思うにこの詩を作り終えて筆を絶つことになったのである
う。唐先生の詩を集めた者は、これらの詩を漏らしている。
それゆえここにそれらを並記した。三月癸巳、餘杭（浙江省）
の強行父幼安が記す。

古樂府命題皆有主意。後之人用樂府爲題者、直當代其人而措詞。如「公無渡河」、須作妻止其夫之詞、太白輩或失之。惟退之「琴操」得體。

【訓読】

古樂府の題を命づくるは皆な主意有り。後の人樂府を用ひて題と爲す者、直だ當に其の人に代わりて詞を措くべきのみ。「公無渡河（公よ河を渡ること無かれ）」の如きは、須らく妻の其の夫を止むるの詞を作すべきも、太白の輩或いは之れを失へり。惟だ退之の「琴操」のみ體を得たり。

【語釈】

※古樂府：「樂府」は、もとは前漢・武帝が設置した主に俗樂をつかさどる役所の名。詩歌には民意が反映されるとし、それを見れば政治の得失が分かるという名目のもと、各地から民間歌謡を集めさせたと言う。後に漢魏晋南北朝期の歴代の王朝が採集した民間歌謡、さらにはそれを本歌として後世の詩人が作った擬作品を樂府と呼ぶようになり、詩歌の一ジャンル

の名称となった。「古樂府」とは、そのうちの本歌にあたる民間歌謡を指して言う。

※命題皆有主意：「命題」は、題を付けること。「主意」は、主となる内容。ここでは、孤兒の嘆きをテーマとした「孤兒行」、我が子の行く末を案じる病気の婦人をテーマとした「婦病行」、酒宴をテーマとした「將進酒」、戦争の悲惨さをテーマとした「戰城南」など、古樂府には題を見れば、主要内容がわかるものが多いことを言うのであろう。

※代人而措詞：「其人」とは、本歌の作者あるいは本歌で歌われる主人公・当事者を指す。「措詞」は、詩文を作るときに言葉を選択し用いること。古樂府に擬して詩を作るにあたっては、本歌の作者・主人公などになり代わって、その視点から言葉を選び描くべきだ、と言うのであろう。

※「公無渡河」：樂府題の一つ。「箜篌引」とも言う。歌辞は『樂府詩集』卷二十六「相和歌辭」に、以下の四句が収められている。——公無渡河、公竟渡河、墮河而死、當奈公何（公よ河を渡る無かれ、公は竟に河を渡る。河に墮ちて死す、當に公を奈何すべけんや）——。朝鮮の渡守であった霍里子高が早朝に船を漕いでいたところ、白髪の狂人が髪を振り乱し壺

を携えたまま河を渡ろうとした。妻の制止も及ばず、夫は河に落ちて死んでしまった。妻は箜篌（ハーブの一種）を弾きながら、この歌を歌い、曲が終わると、夫の後を追いつい河に身を投げたと言う（東晋・崔豹『古今註』巻中「音楽」）。

※太白・盛唐の李白のこと。太白はその字。奔放飄逸な詩風で知られ、杜甫とともに李杜と并称される。

※失之・李白の「公無渡河」に対する評価。李白の「公無渡河」は、前半部分で黄河の洪水を治めた禹の功績を称えた後で、後半部分で本歌を踏まえて、——披髮之叟狂而癡、清晨臨流欲奚爲、旁人惜妻止之、公無渡河苦渡之、虎可搏、河難馮、公果溺死流海湄（披髮の叟は狂にして癡なり、清晨に流れに臨みて奚をか爲さんと欲す、旁人は惜しまざるも 妻は之れを止めんとす、公よ河を渡る無かれといふも 苦しみて之れを渡る。虎は搏つべきも、河は馮し難し、公 果たして溺死して海湄に流る）——と歌う。「失之」とは、李白の作が明らかに、夫を制止する妻の視点からではなく、傍観者の視点から客観的にその場面を描いている点、本歌の作者・主人公などになり代わり、その視点から歌うといった擬古樂府の本来のあり方からはずれていることを、指摘しているのであろう。

※退之・中唐の韓愈のこと。退之はその字。柳宗元とともに古文復興を提唱し、唐宋八大家の一人に数えられる。

※「琴操」・韓愈の「琴操十首」のこと。後漢・蔡邕の『琴操』に、先秦時代の琴の演奏に合わせて歌われた曲の歌辞が収められており、韓愈の「琴操十首」は、その中の「將歸操」「猗蘭操」「龜山操」「越裳操」「拘幽操」「岐山操」「履霜操」「雉朝飛操」「別鶴操」「殘形操」を本歌として作られたもの。「操」は、弾くの意。琴の音色に合わせて歌うこと。

※得體・本来のあり方を得ていること。韓愈の「琴操」に対する評価。十首のうち、とりわけ「公無渡河」と同様、「渡河」の場面をうたった「將歸操」を念頭においていよう。「將歸操」は春秋時代・孔子の作とされる。後漢・蔡邕の『琴操』巻上によれば、趙からの招聘に応じた孔子が狄水を渡ろうとした折りに、趙が賢臣の賣鳴犢を殺したことを聞き、趙への赴任を急遽とりやめ、琴の音色に合わせて歌ったものだという。また、北魏・酈道元の『水経注』巻五「河水五」には、その時の孔子の歌として、——狄水衍兮風揚波、船楫顛倒更相加（狄水は衍れ 風は波を揚ぐ、船楫 顛倒して 更に相ひ加ふ）——の二句を載せる。

一方、韓愈の「將歸操」は、この孔子の歌を踏まえて以下のように歌う。——狄之水兮、其色幽幽、我將濟兮、不得其由、涉其淺兮、石齧我足、乘其深兮、龍入我舟、我濟而悔兮、將安歸尤、歸兮歸兮、無與石鬪兮、無應龍求（狄の水よ、其の色 幽幽たり、我れ將に濟らんとするも、其の由しを得ず、其の淺きを涉らんとすれば、石 我が足を齧み、其の深きに乘らんとすれば、龍 我が舟に入る、我れ濟りて悔ゆるも、將た安くにか尤を歸せんや、歸らんかな歸らんかな、石と鬪ふ無かれ、龍の求めに應ずる無かれ）——と。

韓愈の作は、李白の作とは異なり、本歌の作者・当事者である孔子に成り代わって、当事者の視点に立って、その心情を代弁しているかのようである。「得體」とは、おそらく韓愈の作のこのような点が擬古樂府の本来のありように合致していると言うのであろう。

【通釈】

古樂府の題は、いずれも主要内容が分かるように付けられている。後世の詩人で樂府の題を用いて詩を作る者は、当然その本歌の作者・当事者になり代わって言葉を選び用いなければならぬ。例えば、「公無渡河（公よ河を渡ること無かれ）」

などは、河を渡ろうとする夫を制止する妻の言葉を必ず用いて作らなければならないが、李白の「公無渡河（公よ河を渡ること無かれ）」などは、あるいはそれに背いていようか。ただ韓愈の「琴操」のみ、その本質を掴んでいる。

【備考】

唐庚みずからも「公無渡河」を作っており、以下のように歌う。

公無渡河

公よ河を渡ること無かれ

公無渡河

公よ河を渡ること無かれ

君不見

君 見ずや

吳兒秋悲小海唱

吳兒の秋に小海の唱を悲しみ

湘女夜怨招魂歌

湘女の夜に招魂の歌を怨むを

抱石沉清流

石を抱きて清流に沉み

弄酒奔素娥

酒に弄せられて素娥に奔る

忠血醉蚊虻

忠なる血は蚊虻を酔はしめ

義肉飽鼯鼯

義なる肉は鼯鼯を飽かしむ

暗中水弩貫七札

暗中 水弩 七札を貫き

魚龍百怪垂涎澤

魚龍 百怪 涎を澤に垂れ

吻牙相磨

吻牙 相ひ磨す

公無渡河

公よ河を渡ること無かれ

公無渡河

公よ河を渡ること無かれ

平地猶恐生風波

平地 猶ほ恐る 風波を生ずるを

一一

「小海唱」は、吳王夫差にその屍を長江に流された伍子胥を悼んだ歌。「招魂歌」は、楚の王に疎外され、汨羅に身を投げた屈原の魂を招く歌。「抱石」の句は、『韓詩外伝』巻一などに見える申徒狄の故事を、「弄酒」の句は、酒によつて水面に映つた月を救おうとして溺死した李白の故事を、おそらくは踏まえていよう。「水弩」は、口に含んだ砂を吹き付け、河を渡ろうとする人を射るといふ水中生物。その勢いは七層の鎧をも貫くと言ふ。詩は、水中に没した歴史上の人物の例を挙げたうえて、——伍子胥や屈原のような忠義の人でさえも、ひとたび河に沈んでしまえば、その血や肉は、結局のところ蚊や蟹（龍の一種）、鼈（大きなスッポン）や鼉（ワニ）の腹を満たすための餌食となつてしまふ。水中にはこのように水弩をはじめ、たくさん恐ろしい生き物が水辺で涎を垂らして待ちかまえているのだから、決して河を渡つてはいけない。たとへ平地にいたとしても、風が吹き波が起つて水中に落ちやしないかと心配だ。——と歌う。唐庚の作は、その発言の通り、河を渡ろうとする夫を制止する妻の視点から歌われていると言えよう。

（中国文学専攻 学部四年 吉田奈央）

六經已後、便有司馬遷、三百五篇之後、便有杜子美。六經不可學、亦不須學。故作文當學司馬遷、作詩當學杜子美。二書亦須常讀、所謂「何可一日無此君」也。

【訓読】

六經より已後には、便ち司馬遷有り、三百五篇の後には、便ち杜子美有り。六經は學ぶべからずして、亦た學ぶを須もとひず。故に文を作るには當に司馬遷に學ぶべく、詩を作るには當に杜子美に學ぶべし。二書は亦た須らく常に讀むべきものにして、所謂「何ぞ一日も此の君無かるべけんや」なるものなり。

【語釈】

※六經・儒教の經典とされている六つの書物。『樂經』『易經』『詩經』『書經』『春秋』『禮記』を言う。ただし、『樂經』は散佚して伝わらない。

※司馬遷：字は子長。前漢の歴史家。武帝の時に父の司馬談のあと

を継いで太史令となった。匈奴に降った李陵を弁護して宮刑に処され、発憤して『史記』を著した。

※三百五篇：『詩経』のこと。一説に、各地の歌謡三千余篇の中から、孔子が三百十一篇（うち六篇は題のみ伝わる）を選定したと言う。

※杜子美：盛唐の杜甫のこと。子美はその字。現実社会の矛盾を直視した沈鬱雄渾な詩風で知られ、李白とともに李杜と並称される。

※六經不可學：「学」は、まねをする、の意。六經はまねてはいけない、の意。ここでは、六經は時代も古く典雅すぎることから、詩文を作る際の手本としては相応しくないことを言うのである。

※「何可一日無此君」：東晋の王徽之（字は子猷）が竹を愛好して、竹を指して言った言葉。『世説新語』任誕篇に見える。以後、「此君」は竹の異名となる。『枕草子』の「五月ばかりに、月もなくいと暗き夜」で始まる段にも典故として用いられている。ここでの「此君」は、司馬遷の『史記』と杜甫の詩集を指し、これらの書が一日たりとも欠かせないものであることを言う。

【通釈】

六經の後には司馬遷がおり、『詩経』の後には杜甫がいる。六經はまねてはいけないし、またまねる必要もない。それゆえ、文を作るには当然のこと司馬遷に倣わなければならない。詩を作るには当然のこと杜甫に倣わなければならない。司馬遷の『史記』と杜甫の詩集は、常に読む必要があるものでもあり、いわゆる「どうして一日たりともこの君なしでいられないか」という言葉の通りである。

（中国文学専攻 学部四年 高山香織）

三一

司馬遷敢亂道却好、班固不敢亂道却不好。不亂道又好是「左傳」、亂道又不好是「唐書」。八識田中、若有一毫「唐書」、亦爲來生種矣。

【訓読】

司馬遷は敢て道を亂すも却って好く、班固は敢て道を亂さざるも却って好からず。道を亂さずして又た好きは是れ「左

傳』にして、道を亂して又た好からざるは是れ『唐書』なり。八識の田中に、若し一毫の『唐書』有らば、亦た來生の種と爲らん。

【語釈】

※亂道：『漢書』卷六十二「司馬遷傳」の論贊に、司馬遷の『史記』

に対する後漢・班固の評を載せて、——又其是非、頗繆於聖人、論大道、則先黃老而後六經（又た其の是非は、頗る聖人に繆り、大道を論ずれば、則ち黃老を先にして六經を後にす）

——と言ふ。「亂道」とは、司馬遷の『史記』に、聖人の道・六經の教えを踏みこえた箇所があることを指すのであろう。

※班固：字は孟堅。後漢の歴史家。章帝の時、勅命により『漢書』を著した。

※『左傳』：『春秋左氏傳』の略称。孔子が著したとされる魯国の

歴史書『春秋』に関する注釈書の一つ。『公羊伝』『穀梁伝』とともに、春秋三伝と並称される。『公羊伝』『穀梁伝』が『春秋』に込められた孔子の毀誉褒貶を明らかにすることに重点を置くのに対して、『左伝』は史実の伝述に重きを置く。

※『唐書』：『唐書』には、五代後晋・劉昫らが撰した『旧唐書』

と北宋・宋祁および歐陽脩が撰した『新唐書』があるが、こ

こでは『新唐書』を指す。史実に忠実な著述よりも歐陽脩自身の史観の論述の方に重点が置かれる傾向が見られることなど、『新唐書』に対しては批判も多い。ちなみに、唐庚は第十五条でも、——晚學遽讀『新唐書』、輒能壞人文格（晚學遽かに『新唐書』を讀めば、輒ち能く人の文格を壞す）——と、『新唐書』を痛烈に批判している。

※八識田中、亦爲來生種矣：仏教唯識派の思想で、眼識・耳識・

鼻識・舌識・身識・意識の六識に、末那識（深層に働く自我執着心）と阿頼耶識（自己の心や肉体など、あらゆる存在を生み出す力を貯える場）を合わせて八識という。「八識田」とは、第八番目の阿頼耶識を指す。唯識派では、ありとあらゆる存在を生み出す力を、植物の種に喩えて「種子」と呼び、阿頼耶識はそれらを貯える場であることから、「田」に喩えられる。現世のあらゆる体験の一つ一つが「種子」として「八識田（阿頼耶識）」に貯えられ、その一つ一つの「種子」が来世において芽を出し、来世における自己形成に関与するとされる。ここでは、『新唐書』のような出来の悪い書を読むと、その体験が「種子」として「八識田（阿頼耶識）」に貯えられてしまうことになり、それが来世において芽を出し、必ず

や悪影響を及ぼす、ということをおうとしているのである。
う。

【通釈】

司馬遷は思い切って聖人の道・六経の教えを踏みこえて『史記』を著したが、その出来はかえってすばらしく、班固は『漢書』を著すにあたり、聖人の道・六経の教えを決して踏みこえようとはしなかったが、その出来はかえってよいとは言えない。聖人の道・六経の教えを踏みこえることなく、しかもよい出来と言えるのは『左伝』であり、聖人の道・六経の教えを踏みこえて、しかも出来が悪いのは『新唐書』である。八識田（阿頼耶識）の中に、もしわすかでも『新唐書』を読むという体験を貯えてしまったならば、来世においてもその「種子」が芽を出し、必ずや悪い影響を及ぼすことになるであらう。

【備考】

『史記』と『漢書』の評価については、唐代の中頃までは『漢書』の評価が高かったが、韓愈が『史記』を評価して以降、『史記』の方が高く評価されるようになり、明代に至って双方が公正に評価されるようになったと言う（大木康『史記』と『漢書』中国文化のパロメ

ーター』岩波書店、二〇〇八年、参照）。

（中国文学専攻 学部四年 川路梨月）

四

三謝詩、靈運爲勝。當就『文選』中寫出熟讀、自見其優劣也。

【校異】

校：「文」の字は、學海類編に依って補った。

【訓読】

三謝の詩、靈運もて勝れりと爲す。當就し『文選』中より寫し出して熟讀すれば、自ずと其の優劣を見るなり。

【語釈】

※三謝：謝靈運・謝惠連・謝朓の三人を指す。謝靈運は、陳郡陽夏

（河南省）の人。叔父謝琨の康樂公の爵位を継いだため、謝康樂とも称される。東晋時代の名門、謝氏の家系に生まれたが、劉裕が宋王朝を開いて以降、政治に与らせてもらえず、山水の間に遊び詩を作ることで、その不満を紛らわそうとし

た。その詩は、山水自然の写実的な描写に優れ、山水詩人の祖とされる。

謝惠連は、謝靈運の従弟。詩文の才に優れ、謝靈運もその才能を高く評価し、惠連に対面するたびごとに、よい句が思い浮かんだと言う。しかし、その才能を十分に發揮することなく、三十七歳で亡くなった。

謝朓は、謝靈運と同族で、一つ下の世代に属す。齊の永明年間に竟陵王蕭子良の文学集団に加わり、沈約らとともに「竟陵の八友」に数えられる。その繊細かつ清新な詩は、梁の武帝や唐の李白など、多くの愛好者を得た。宣城郡の太守に就任した経歴を持つことから、謝宣城とも称される。

※靈運爲勝：三謝の中では、謝靈運の詩が最も優れている、の意。

ちなみに、南朝梁・鍾嶸もまた『詩品』の中で、謝靈運を上品に、謝惠連と謝朓の二人を中品に位置づけている。

※當就：仮定（もしくならば）の意を表す。後の時代の文献になる

が、『近思録集註』付説に引く胡氏の言葉に、——學者當就小學近思録熟讀、體驗有所得、方可博觀古今（學ぶ者 當就し『小學』『近思録』もて熟讀し、體驗 得る所有らば、はて古今を博觀すべきなり）——とあり、『朱子讀書法』卷三に、

——但當就論孟經書中、教以躬行之意、庶不相遠（但當就し『論』『孟』の經書の中より、教ふるに躬ら行ふの意を以つてすれば、相ひ遠からざるに庶し）——とあり、『性理大全』卷四十四に、——學者但當就意見上分真妄、存其真者、去其妄者而已（學ぶ者 但當就し意見の上にて真妄を分たば、其の真なる者を存し、其の妄なる者を去るのみ）——とあるなど、主に語録のような官話（白話）文体で書かれた文献の中で用いられている。

【通釈】

謝靈運・謝惠連・謝朓の三人の詩の中では、謝靈運の詩が勝っている。もし、『文選』の中から三者の詩を写し出して熟読したならば、その優劣はおのずと明らかとなるう。

（中国文学専攻 学部二年 林 美江）

五

唐人有詩云「山僧不解數甲子、一葉落知天下秋」。及觀陶元亮詩云「雖無紀曆志、四時自成歲」、便覺唐人費力。如「桃源記」言「尚不知有漢、無論魏晉」、可見造語之簡妙。蓋晉人工

造語、而元亮其尤也。

【訓読】

唐人に詩有りて云ふ、「山僧 甲子を數ふるを解せざるも、

一葉 落ちて 天下の秋を知る」と。陶元亮の詩に「曆を紀すの志無しと雖も、四時は自ずと歳を成す」と云ふを觀るに及べば、便ち唐人の力を費やすを覺ゆ。「桃源記」に「尚ほ漢有るを知らず、魏晉を論ずる無し」と言ふが如きは、造語の簡妙を見るべし。蓋し晉人は造語に工にして、而して元亮は其の尤なり。

【語釈】

※「山僧」の二句：作者は不明。「一葉落知天下秋」の句は、『淮南

子』説山訓の——見一葉落、而知歳之將暮、暗瓶中之冰、而

知天下之寒（「一葉の落つるを見て、歳の將に暮れんとするを

知り、瓶中の冰を暗て、天下の寒きを知る）——を踏まえて

いる。なお、詩の例ではないが、唐・李子卿の「聽秋蟲賦（秋

蟲を聽くの賦）に、——時不與兮歲不留、一葉落兮天地秋（時

は與とどにせずして歳は留まらず、一葉 落ちて天地 秋なり）

——と、類似の句がある。

※陶元亮：東晉の人。名は潛、字は淵明。一説に、名は淵明、字は

元亮。官職に就いたものの性分に合わず、彭沢県の令を最後

に官を辞し、故郷の田園に帰り、自然の中で悠々自適の生活

を送った。

※「雖無」の二句：陶淵明の「桃花源詩」の一節。「紀曆志」は、

曆を記した書籍。

※費力：ことさらに力を費やすこと。ここでは、唐人の詩句が明ら

かに『淮南子』説山訓の一節を踏まえているように、技巧を

凝らして作ってやろうといった作為の跡が見える点、陶淵明

の自然の境地から発せられた詩句に及ばないことを言う。

※「桃源記」：陶淵明の「桃花源記」のこと。「尚」の字は、通行

本では「乃」の字に作る。

【通釈】

唐人の詩で「曆とは無縁な山寺の僧侶たちは、日付を数え

ることなどできないが、一枚の葉が落ちるのを目にして、天

下の秋の訪れを知る」という句がある。しかし、陶淵明の詩

に「曆を記した本などはないけれども、四季がめぐりおのず

と一年となる」とある句を見たならば、すぐさま唐人の詩句

がよい言葉を造り出してやろうと、ことさらに力みすぎてい

ることに気づくであろう。同じく陶淵明の「桃花源記」に見える「今なお漢という時代があったことさえ知らない。魏晋の時代については論ずるまでもない」という一節などは、言葉を作り出すうえでの簡潔かつ精妙な趣きを見てとることができる。思うに、晋代の人は言葉を作り出すことに巧みであるが、陶淵明はその中でも最も優れた人だと言えよう。

(中国文学専攻 学部二年 古川愛子)

六

杜子美秦中紀行詩、如「江間饒奇石」、未爲極勝、到「暝色帶遠客」、則不可及已。

【訓読】

杜子美の秦中紀行の詩、「江間 奇石饒おほし」の如きは、未だ極めて勝れりと爲さず。「暝色 遠客を帶ぶ」に到れば、則ち及ぶべからざるのみ。

【語釈】

※杜子美：盛唐の杜甫のこと。子美はその字。乾元二年（七五九）

七月、華州（陝西省）の司功參軍であった杜甫は、安史の乱による食糧事情の悪化のため、官を棄て家族を連れて、從姪・杜佐の住む秦州（甘肅省）に赴いた。しかしそこでの生活も苦しく、安住の地を求めて、同谷（甘肅省）さらには成都（四川省）へと生活の拠点を移すことになる。

※「江間」の句：「秦中紀行の詩」とあることから、杜甫の「秦州

雜詩二十首」がまっ先に思い浮かぶが、この句は実際には、

秦州から同谷県へ至ったあと、さらに成都へ向けて旅する途

中に作った「石櫃閣」と題する五言古詩の第四句目に見え、

——蜀道多早花（蜀道 早花多し）——と対句を構成する。

※「暝色」の句：同じく「石櫃閣」詩の第八句目に見え、——清暉

回群鷗（清暉に群鷗回る）——と対句を構成する。第七条の

【備考】も参照。

【通釈】

杜甫の秦州での旅を記した詩について、「川には奇抜な形の石がたくさんある」という句などは、まだ極めて優れているとまでは言えないが、「暮色がしだいに旅人を包み込む」という句に至っては、これに匹敵できるものはない。

(中国文学専攻 学部二年 鈴木詩歩)

子美詩云「天欲今朝雨、山歸萬古春」、蓋絶唱也。余惠州詩亦云「雨在時時黑、春歸處處青」。又云「片雲明外暗、斜日雨邊晴。山轉秋光曲、川長暝色橫」。皆閒中所得句也。

【訓読】

子美の詩に「天は欲す 今朝の雨、山には歸る 萬古の春」と云ふは、蓋し絶唱なり。余の惠州にての詩にも亦た「雨在りては 時時に黒く、春 歸りては 處處に青し」と云ふ。又た「片雲 明外に暗く、斜日 雨邊に晴る。山に轉じて 秋光 曲がり、川は長く 暝色 横たはる」と云ふ。皆な閒中に得る所の句なり。

【語釈】

※子美：盛唐・杜甫のこと。子美はその字。

※「天欲」の二句：杜甫の五言排律「上白帝城（白帝城に上る）二

首」其の一節。

※絶唱：この上なく優れた詩文を言う。

※「雨在」の二句：唐庚の五絶「栖禪暮歸書所見（栖禪より暮れに

歸り見る所を書す）二絶」其一の冒頭二句。「栖禪」は、山の名。唐庚には、同じく惠州期の作に、「登栖禪山（栖禪山に登る）」と題する七絶がある。ちなみに、この山には栖禪寺という寺があり、蘇軾が朝雲という妾を葬ったところとして知られる。

※「片雲」の四句：唐庚の五律「雜詩二十首」其十八の頷聯と頸聯。

なお、頸聯に見える「暝色」は、おそらく第六条に見える、杜甫「石櫃閣」詩の「暝色帶遠客」句を踏まえていよう。【備考】を参照。

【通釈】

杜甫の詩に、「天は今日の雨降りを望んでいたかのようである。山には再び万古より変わらぬ春が帰ってきた」とある。

私が思うに、この上なく優れた句である。惠州に貶謫されていた時の私の詩にも、「雨がなおも降り続き、いつまでも雲が黒々と空を覆っているが、春が戻り、山の至るところ草木が青々と茂っている」とある。さらに他の詩に、「明るさの戻った空の向こう側は、なおも一片の雲が残っていて暗い。雨雲が途切れた辺りに夕日が現れ、晴れ間をもたらしている。山

の端には秋の月が転がるように移りゆき、ゆらゆらと光を射し込んでゐる。川はどこまでも遠く流れ、暮色が横たわるように辺りを包み込んでゐる」とある。いずれも閑職に身を置いていた時期に出来た句である。

【備考】

「暝色」の「暝」字については、平声と去声の二つの音がある。清・仇兆鰲は『杜詩詳注』巻九において、「石櫃閣」詩の「暝色帶遠客」句の「暝」字に対して、「音、明」と音注をつけている。つまり、平声で読むとするのである。ところが、「暝」字が平声だとすると、唐庚の句は「川○長○暝○色○横○」となり、四字目で仄声が孤立することになる。唐庚の詩の場合は、近体詩の平仄の格律からみれば、「川○長○暝○色○横○」と、仄声（去声）で読む方が望ましい。

ちなみに、杜甫の「暝色帶遠客」句は、その前の「清○暉○回○群○鷗○」句と対句を構成している。もし、「暝」字が去声であるとすれば、「暝色●●帶遠客」となり、平仄の上でもきれいな対になる。あるいは杜甫は、意図的にそのような平仄配置をしているのではないだろうか。もしそうだとすれば、仇兆鰲の音注の妥当性については、他の用例を調べるなど、検討してみる必要がある。

（中国文学専攻 学部三年 渡邊光歩）

八

子美云「舜擧十六相、身尊道何高。秦時用商鞅、法令如牛毛」。其於治道深矣。

【訓読】

子美は云ふ、「舜は十六の相を擧げ、身は尊くして 道は何ぞ高き。秦の時 商鞅を用ひ、法令 牛毛の如し」と。其の治道に於けるや深し。

【語釈】

※子美：盛唐・杜甫のこと。子美はその字。

※「舜擧」の四句：杜甫の「述古（古を述ぶ）三首」其二の末尾の四句。ただし、「用」字は「任」字に作る。

※舜擧十六相：「舜」は、古代の聖人天子。「十六相」は、舜が用いた十六人の有能な宰相。高陽氏の八人の才子、すなわち「八愷」と、高辛氏の八人の才子、すなわち「八元」を指す。『春秋左氏伝』文公十八年に、——是以堯崩而天下如一。同心戴舜、以爲天子、以其擧十六相、去四凶也（是こを以って、堯

は崩ずるも天下は一の如し。心を同じくして舜を戴き、以つて天子と爲すは、其の十六の相を擧げ、四凶を去るを以つてすればなり」——とあるのを踏まえる。

※商鞅：戦国時代・衛の人。姓は姫、氏は公孫、名は鞅。秦の孝王に仕えて法による政治を唱えた。商に封ぜられたので、商鞅という。

※如牛毛：牛の毛のように非常に細密なこと。

【通釈】

杜甫の詩に、「舜は十六人の賢人を宰相として挙用したため、その身は尊ばれ、その政道はなんとも立派なものとなつたではないか。秦の時代には法家の商鞅を用いて一任したため、牛の毛のように細かな法令に縛られるようになった」とある。その治世についての見識たるや、深いものがある。

(中国文学専攻 学部三年 岩田 碧)

九

東坡作「病鶴詩」、嘗寫「三尺長脰瘦軀」、缺一一字。使任德翁輩下之、凡數字。東坡徐出其藁、蓋「閣」字也。此字既

出、儼然如見病鶴矣。

【訓読】

東坡「病鶴の詩」を作るに、嘗て「三尺長脰瘦軀」を寫し、其の一字を缺く。任德翁の輩をして之れに下さしむること、凡そ數字。東坡 徐ろに其の藁を出すに、蓋し「閣」の字なり。此の字 既に出づれば、儼然として病鶴を見るが如し。

【語釈】

※東坡：北宋の蘇軾、字は子瞻のこと。東坡はその号。眉州眉山(四川省)の人。仁宗の嘉祐二年(一〇五七)、弟の蘇轍とともに進士に及第し、高級官僚としての道を順調に歩み始めたが、神宗の時に王安石の新法に異を唱えたため、地方官として杭州(浙江省)をはじめ各地を転々とした。さらに、その詩が朝廷を誹謗したとの讒言により投獄され、黄州(湖北省)に貶謫される。東坡居士と号したのは、この時期のことである。元祐年間に、一時期中央に復帰するも、まもなく新法党の巻き返しに遇い、惠州(広東省)、さらには海南島(海南省)へと流されるに至る。その後、罪を許され中央に帰還する途中、常州(江蘇省)で亡くなった。北宋を代表する詩人で、その

門下には、黄庭堅や秦觀など、多くの人材が集まった。散文では、父の蘇洵、弟の蘇轍とともに唐宋八大家に数えられる。ほか、絵画や書にも優れる。

※「病鶴詩」：「鶴歎（鶴の歎き）」と題する七言古詩。その第六句目に、——三尺長脛閑瘦軀（三尺長脛 瘦軀を閑く）——とある。

※三尺：一尺は約三十センチメートル。

※任德翁：任伯雨のこと。徳翁は、その字。蘇軾と同郷の眉州眉山（四川省）の人。神宗の元豊五年（一〇八二）の進士。『宋史』卷三四五に伝があり、『全宋詩』卷一〇三二（第十八冊）に詩が九首収められている。

※下：筆を用いて詩文を作ること。ここでは、この六字に一字を追加して、句を完成させること。

※閑：支える。

【通釈】

蘇軾が「病んだ鶴の詩」を作り、あるとき「三尺長脛瘦軀（三尺の長い足で瘦せた身体を……）」の六字だけを書き写して、わざと一字を欠けたままにした。そして任伯雨に一字を追加させたところ、任伯雨が書き記した字は数字に及んだ。蘇軾

はゆつくりとその草稿を取り出し示したところ、そこに記されていたのは、「閑（支える）」の一字であった。この字が示されてみると、確かに病んだ鶴の姿がくつきりと目に映るかのような。

（中国文学専攻 学部三年 岡本真依）

十

「琴操」非古詩、非騷詞。惟韓退之爲得體。退之「琴操」、柳子厚不能作、子厚「皇雅」、退之亦不能作。

【訓読】

「琴操」は古詩に非ず、騷詞に非ず。惟だ韓退之のみ體を得たりと爲す。退之の「琴操」は、柳子厚 作る能はず、子厚の「皇雅」は、退之も亦た作る能はず。

【語釈】

※「琴操」：第一条の【語釈】を参照。

※古詩：古体詩。「騷詞」との対応関係から、あるいはその源泉である『詩経』を多分に意識しているかもしれない。ちなみに、

『詩経』を「古詩」と表現する例として、後漢・班固「兩都賦」序に、——賦者、古詩之流也。……抑亦雅頌之亞也（賦なる者は、古詩の流れなり。……抑そも亦た雅頌の亞なり）

——とあり、西晋・摯虞の『文章流別論』に、——古詩率以四言爲體（古詩は率ね四言を以つて體と爲す）——とある。

※騷詞：戦国時代・楚の屈原の作と伝わる「離騷」を初めとした『楚辞』の流れを汲む文字作品を言う。

※韓退之：中唐の韓愈のこと。退之はその字。科擧の試験に幾度も失敗するなど、官職に就くにあたつては、自らも決して順風満帆ではなかつたこともあり、詩壇の領袖として、孟郊・張籍・李賀・王建・賈島など、寒門の詩人たちを積極的に支援した。また「論佛骨表（佛骨を論ずるの表）」を奉り憲宗の逆鱗に触れたことで知られる。唐宋八大家の一人に数えられる。

※柳子厚：中唐の柳宗元のこと。子厚はその字。順宗の時、王叔文の政治改革に参加し、宦官や藩鎮勢力を排除しようとしたが、順宗が病に倒れ、憲宗が即位すると、守旧派の巻き返しに遇い、王叔文の失脚に連坐して、永州（湖南省）に貶謫、さらには柳州（広西チワン族自治区）に貶謫され、かの地で没した。韓愈とともに古文の復興を唱え、唐宋八大家に数えられ

る。

※「皇雅」：「平淮夷雅（淮夷を平らぐるの雅）二篇」其一「皇武篇」のこと。「平淮夷雅二篇」は、元和十三年（八一八）の作。

その前年、宰相の裴度が憲宗の命により、淮西節度使・吳元済の反乱を蔡州（河南省）で鎮圧した。その知らせを柳州で聞いた柳宗元が憲宗に提出することを目的として作つたもので、「皇武篇」と「方城篇」の二篇からなる。その詩は、『詩経』「大雅・江漢」を意識していると思われ、その毛伝の小序には、——江漢、尹吉甫美宣王也。能興衰撥亂。命召公平淮夷（江漢は、尹吉甫 宣王を美むるなり。能く衰を興し亂を撥む。召公に命じて淮夷を平らげしむ）——とある。「皇武篇」は、裴度の武功を讃えたもの（【備考】を参照）。なお、このとき韓愈は裴度の幕下におり、乱の平定に貢献している。

【通釈】

「琴操」は、『詩経』の流れを汲む古体詩ではなく、また『楚辞』の流れを汲む辞賦でもない。ただ韓愈の「琴操」のみその本質を挿んでいると言える。韓愈の「琴操」のような作は、柳宗元には作れないし、同様に柳宗元の「皇雅」のような作は、韓愈には作れない。

【備考】

「皇武篇」は、各章八句、全部で十一章からなる。以下、其の二を例示する。

皇咨于度、惟汝一德、曠誅四紀、其侯汝克。

錫汝斧鉞、其往視師、師是蔡人、以宥以釐。

〔皇 度に咨るは、汝が徳を一にするを惟へばなり。曠く四紀を誅せしめ、其れ汝が克つを俟つ。汝に斧鉞を錫ひ、其れ往きて師を視しむ。師は是れ蔡人なれば、以つて宥し以つて釐めよ。〕
〔四紀〕は、四十八年。ここでは、五十年近く三代に亘つて、淮西を支配していた呉氏一族を指す。「錫汝斧鉞」は、裴度に蔡州の統治権を与えること。「師」は、民衆。

（地理学専攻 学部三年 壹岐英明）

十一

東坡詩、叙事言簡而意盡。忠州有潭、潭有潛蛟、人未之信也。虎飲水其上、蛟尾而食之、俄而浮骨水上、人方知之。

東坡以十字道盡、云「潛鱗有饑蛟、掉尾取渴虎」。言「渴」

則知虎以飲水而召災、言「饑」則蛟食其肉矣。

【訓読】

東坡の詩、事を叙ぶるに言は簡にして意は盡くせり。忠州に潭有り、潭に潛蛟有るも、人未だ之れを信ぜざるなり。

虎水を其の上ほかりに飲むに、蛟尾おひて之れを食らひ、俄かにして骨を水上に浮かべしむれば、人方はじめて之れを知る。

東坡十字を以つて道いひ盡くして、「潛鱗 饑蛟有り、尾を掉おひて渴虎を取る」と云ふ。「渴」と言へば則ち虎の水を飲むを以つて災ひを召くを知り、「饑」と言へば則ち蛟其の肉を食らへり。

【語釈】

※東坡：第九条の【語注】を参照。

※忠州：現在の四川省重慶市忠県。ただし、蘇軾に忠州に赴任した

経歴が見られないこと、また後半に引用されている「潛鱗」の二句が惠州（広東省）に貶謫されていた時期の作であることから、おそらく惠州の誤りであろう。いわゆる魯魚の誤りと思われる。

※潛蛟：水底に潜む蛟。蛟は、想像上の生き物。龍の一種。水中にいて、毒気を吐いて人に危害を加えると言う。

※尾：あとを追う。

※「潜鱗」の二句：蘇軾の「白水山佛迹巖（白水山の佛迹巖）」詩

の一節。白水山は、羅浮山の東麓。惠州の東北二十里のところにある。瀑布があり乳白色の水が流れていることから、その名がある。その瀑布の西に佛迹巖があり、岩に巨人の足跡のようなくぼみがあることから、その名がある。唐庚も惠州に貶謫されていたときに、この場所に立ち寄ったことがあったらしく、「佛迹記（佛迹の記）」を書いている。

※潜鱗：水に潜む鱗をもった水中生物。すなわち魚類のこと。ここでは蚊を指す。

【通釈】

蘇軾の詩は、事柄を叙述するにあたり、言葉は簡潔でありながらも、言おうとしている事は十分に言い尽くしている。忠州に深い淵があり、淵の底に蚊が潜んでいたが、まだ誰もそれを信じる者はいなかった。あるとき虎がそのほとりで水を飲むとしていたところ、そのあとを追った蚊に食われてしまい、まもなくして骨が水面に浮かんできたことから、人々ははじめてそれが事実であることを知ったのである。

蘇軾はその事をわずか十字で表現しつくして、「淵の底に飢

えた蚊が潜んでおり、尾を振るいつつ喉の渴いた虎を捕まえた」と詠んだ。「渴」と言えば、それだけで、虎が水を飲みにきたことによつて災いを招いてしまったことが分かり、「饑」と言へば、それだけで、蚊が虎の肉を食べたことが分かるであらう。

（美学美術史学専攻 学部三年 中根若恵／

心理学専攻 学部三年 安藤由妃）

十二

謝固爲綿州推官。推官之廨、歐陽文忠公生焉。謝作六一堂、求余賦詩。余雅善東坡以約詞紀事。冥搜竟夕、僅得句云「即彼生處所、館之與周旋」。然深有愧于東坡矣。

【校異】

校：「夕」は、もと「久」に作る。學海類編に依つて改めた。

【訓読】

謝固 綿州の推官と爲る。推官の廨、歐陽文忠公 焉に生

まる。謝六一堂を作り、余に求めて詩を賦せしむ。余雅（ま）に東坡の約詞を以つて事を紀すを善しとす。冥搜すること竟夕、僅かに句を得て云ふ、「即ち彼の生處の所なれば、之れに館して與に周旋せん」と。然れども深く東坡に愧づる有り。

【語釈】

※謝固：いかなる人物かは不明。【備考】を参照。

※綿州推官：「綿州」は現在の四川省綿陽市。「推官」は州の司法をつかさどる官職。

※歐陽文忠公：北宋の歐陽脩のこと。字は永叔、号は醉翁。晩年は六一居士と号した。文忠は諡。古文の復興を支持し、科擧の試験官の際に、蘇軾・蘇轍・曾鞏らを拔擢した。なお、唐庚の「六一堂」詩の序【備考】を参照）によれば、歐陽脩は、綿州の戸籍などをつかさどる司戸の庁舎で生まれ、そこはもと綿州推官の庁舎であったと言う。

※六一堂：綿州推官の庁舎、すなわち歐陽脩の生誕の地に建てられた屋敷。その名は、歐陽脩の号にちなんでの命名。歐陽脩は、自らの身のまわりにある「藏書一、万卷・金石の遺文一、千卷・琴一張・碁一局・酒一壺」の五つの「一」に「一翁（歐陽脩自身）」を加えて、六一居士と号した。

※約詞：簡明な言葉。

※冥搜：目を閉じて心の中で考える。

※「即彼」の二句：「六一堂」と題する全部で二十八句からなる五言古詩の一節。【備考】を参照。

【通釈】

謝固が綿州の推官となった。推官の役所は、歐陽脩が生まれたところである。そこで謝固は歐陽脩の号にちなんで六一という名の堂を建てて、私に詩を作るよう求めてきた。私は常々、蘇軾が簡明な言葉で事柄を書き記すことを好ましく思っていた。そこで一晩中、心静かに考えたすえに、かろうじて「まさしく歐陽脩が生まれた所であるならば、この六一堂に宿泊して、ともにめぐりまわりたいものだ」という二句を得た。しかし、なかなか蘇軾のようにうまくはいかず、蘇軾に対して何とも深く恥じ入るばかりである。

【備考】

唐庚の「六一堂」詩の序に、以下のように言う。——綿州司戸廨舎、舊為推官廳、歐陽文忠公生於此。近歲陵井譚望勉翁為參軍、葺一室于廳事之東偏、號曰六一堂。予聞而嘉之、為賦此篇（綿州司戸の廨舎、舊と推官の廳たりて、歐陽文忠公 此こに生まる。近歲 陵井の譚望

勉翁 參軍と為り、一室を廳事の東偏に葺き、號して六一堂と曰ふ。予 聞きて之れを嘉し、為に此の篇を賦す」——。この序によれば、六一堂を建てたのは、謝固ではなく、譚望勉という人物ということになる。あるいは、強幼安の記憶違いであろうか。

(東洋史学専攻 学部三年 木村有希)

十三

韓退之作古詩、有故避屬對者。「淮之水舒舒、楚山直叢叢」

是也。

【訓読】

韓退之 古詩を作るに、故ら(たが)に屬對を避くる者有り。「淮の水は舒舒たり、楚の山は直にして叢叢たり」なるは、是れなり。

【語釈】

※韓退之：第十条の【語注】を参照。

※「淮之」の二句：韓愈の「此日足可惜贈張籍（此の日 惜しむべ

きに足る 張籍に贈る）」詩の一節。貞元十五年（七九九）、

韓愈三十二歳、徐州（江蘇省）での作。韓愈を訪ねにやってきた張籍との別れを惜しんで作ったもの。ちなみに張籍は、前年の貞元十四年（七九八）、汴州（河南省）にて進士科の予備試験（郷試）を受けているが、その時の試験委員が韓愈であった。

【通釈】

韓愈は、古体詩を作る際に、わざと対句を避けることがある。「淮河の水はゆるやかに、楚の山はまっすぐに聳え立ち、木々が群がり生えている」などは、その例である。

(人文学専攻日本文化学専門 博士課程後期課程一年 岡 英里奈)

十四

杜子美祖「木蘭詩」。

【訓読】

杜子美は「木蘭の詩」に祖ならふ。

【語釈】

※杜子美：盛唐・杜甫のこと。子美はその字。

※祖：手本とする。

十五

※「木蘭詩」：老いた父に代わって戦争に従事した木蘭という名の

娘を歌った詩。作者は不詳。北朝の民間歌謡に由来するとされる。

【通釈】

杜甫は、「木蘭の詩」を手本としている。

【備考】

杜甫には、反戦・厭戦を主題とした詩が多く見られる。杜甫が「木蘭詩」のどのような点を手本としたかについて、唐庚は詳しくは語っていないが、おそらくは杜甫のそのような作を念頭に置いた発言と思われる。例えば、杜甫の「兵車行」に、——「耶娘妻子走相送（耶娘妻子 走りて相ひ送る）」——とあり、父母を意味する「耶娘」という口語が用いられているが、この点については「木蘭詩」の——「朝辭爺孃去（朝に爺孃を辭して去る）」——という句の「爺孃」からの影響が指摘できるであろうし、また杜甫の「石壕吏（石壕の吏）」に描かれる、老婆が夫に代わって戦地に赴くという場面などは、その発想を「木蘭詩」から得ていると思われる。

（人文学専攻日本文化学専門 博士課程後期課程一年 岡 英里奈）

晩學遽讀『新唐書』、輒能壞人文格。『舊唐書』贊語云「人安漢道之寬平、不厭高皇之嫚罵」。其論唐亡云「注江海以救焚、焚收而溺至。引鳩爵以止渴、渴止而身亡」。亦自有佳處。

【訓読】

晩學 遽かに『新唐書』を讀めば、輒ち能く人の文格を壞す。『舊唐書』の贊語に云ふ、「人は漢道の寬平なるを安んずれば、高皇の嫚罵するを厭はず」と。其の唐の亡ぶを論じて云ふ、「江海を注ぎて以つて焚を救はんとするも、焚 收まりて溺 至る。鳩爵を引きて以つて渴を止めんとするも、渴 止まりて身 亡ぶ」と。亦た自ずから佳處有り。

【語釈】

※『新唐書』：第三条の【語注】（※『唐書』）を参照。唐庚が『新

唐書』に対して批判的であったことについては、第三条を参照。

※文格：文章の格調。

※『舊唐書』：第三条の【語注】（※『唐書』）を参照。

※「人安」の一節：『旧唐書』卷一「高祖本紀」に見える言葉。こ

こでは「贊語云」として提示されているが、より正確には、その直前の「史臣曰」として記されている記述の中に見える。

文字の異同があり、——人懷漢道之寛平、不責高皇之慢罵（人は漢道の寛平なるを懷へば、高皇の慢罵するを責めず）——に作る。寛大な政治を行った唐の高祖を前漢の高祖になぞらえて讚えたもの。

※「注江海」の一節：『舊唐書』には見えず、『舊五代史』卷八

十「晉書六」に、「史臣曰」として、以下のような類似の一節がある。——決鯨海以救焚、何逃没溺。飲鳩漿而止渴、終取喪亡（鯨海を決して以って焚を救はんとすれば、何ぞ没溺を逃れんや。鳩漿を飲んで渴を止めんとすれば、終に喪亡を取）——。これは、五代・後晋の石敬瑭が後唐を滅ぼすにあり、燕雲十六州を割讓して契丹と手を結んだ結果、最終的には後晋もまた、二代目の石重貴の時に契丹に滅ぼされるはめになったことを比喻したものである。はたして、「注江海」の一節が『舊五代史』の一節と同じものを指すとすれば、「其論唐亡云（其の唐の亡ぶを論じて云ふ）」とあるのは、正確には後唐を滅ぼした後晋が滅ぶことを論じたものであるので、

『舊五代史』論後晋亡云（『舊五代史』に後晋の亡ぶを論じて云ふ）と改められるべきであろう。おそらく唐庚または強幼安のいずれかの記憶違いであろう。

※鳩爵：「鳩」は、伝説上の鳥の名。毒を持ち、その羽毛をひたし

た酒を飲むと死に至るといふ。「爵」は、三本の足がついていゝる酒器。

【通釈】

晩年になつて学に志した人があわてて『新唐書』を読むと、読むたびごとにその人の文章の格調を損なつてしまふことになる。『旧唐書』の贊語に「人々は寛大で公平な漢の政治を慕つたので、前漢の高祖の無礼なのしりさえも嫌とは思わなかつたのだ。」と言う。また、唐の滅亡を論じて「長江や海の水を注いで焼土を救おうとしても、火が収まつたかと思えば、今度は溺死が待っている。鳩酒の入つた酒器を手にとつて喉の渴きを癒そうとしても、喉の渴きが癒えたかと思えば、今度はその身自体の破滅を招く」と言う。ここにも自ずと優れたところが認められる。

（人文学専攻中国文学専門 博士課程後期課程二年 金明蘭）

詩在與人商論、深求其疵而去之。等閒一字放過、則不可。

殆近法家、難以言恕矣。故謂之詩律。東坡云「敢將詩律鬪深嚴」。余亦云「律傷嚴、近寡恩」。大凡立意之初、必有難易二塗。學者不能強所劣、往往捨難而趨易。文章罕工、每坐此也。作詩自有穩當字、第思之未到耳。

皎然以詩名于唐。有僧袖詩謁之。然指其「御溝詩」云「此波涵聖澤」、波字未穩當改」。僧艷然作色而去。僧亦能詩者也。皎然度其去必復來、乃取筆作「中」字掌中、握之以待。僧果復來、云欲更爲「中」字如何。然展手示之、遂定交。要當如此乃是。

【訓読】

詩は人と商論し、深く其の疵を求めて之れを去るに在り。

一字を等閒して放過すれば、則ち不可なり。殆ど法家に近く、以つて恕と言ひ難し。故に之れを詩律と謂ふ。東坡は「敢て詩律を將つて鬪ふこと深嚴ならん」と云ふ。余も亦た「律は傷だ嚴にして、恩寡きに近し」と云ふ。大凡そ意を立つるの初

め、必ず難易の二塗有り。學ぶ者劣る所を強むる能はずして、往往にして難きを捨てて易きに趨る。文章は工なること罕なれば、毎に此れに坐するなり。詩を作るには自ずと穩當の字有り。第だ之れを思ふも未だ到らざるのみ。

皎然は詩を以つて唐に名あり。僧の詩を袖して之れに謁する有り。然其の「御溝の詩」を指して「此の波聖澤を涵す」は、波の字未だ穩やかならずして當に改むべし」と云ふ。僧艷然として色を作して去る。僧も亦た詩を能くする者なり。皎然其の去るも必ず復た來たらんことを度り、乃ち筆を取りて「中」の字を掌中に作し、之れを握りて以つて待つ。僧果たして復た來たり、更めて「中」の字と爲さんと欲せば如何と云ふ。然手を展きて之れを示し、遂に交りを定む。要當ず此くの如くんば、乃ち是なるなり。

【語釈】

※法家：戦国時代の諸子百家の一つ。厳格な法を基準に政治を行うことを説いた。ここでは、近体詩の規則が厳格であることを比喻する。

※恕：儒家の説く徳目の一つ。他者に対する思いやり。

※「敢將」の句：蘇軾の「謝人見和前篇（人の前篇に和せらるるに謝す）二首」其一の冒頭の二句に、——已分酒杯欺淺懦、敢

將詩律鬪深嚴（已に酒杯の淺懦を欺くを分とするも、敢て詩律を將つて鬪ふこと深嚴ならん）——とある。自らの詩に唱和した詩を返してくれた人に、再びそれに唱和した詩を贈つて感謝の意を表したのも。両者の間での詩のやりとりは、おそらく唱和詩の中でも最も規則の厳しい次韻によるものであったと思われる。冒頭の二句は、「わたし自身、酒に弱いことを十分にわかまえており、酒ではとてもあなたに太刀打ちできないが、詩においては、厳格な規則を駆使することで、思い切つてあなたに戦いを挑みたい」といった意味であろう。二句目は、本来「敢將詩律深嚴鬪（敢て詩律の深嚴なるを將つて鬪はん）」とあるところを、韻字や平仄の関係で語順を変えているのであろう。

※「律傷嚴、近寡恩」：文淵閣四庫全書本『宋詩鈔』卷四十六所収

の唐庚の「遣興（興を遣る）二首」其二の冒頭二句に、——酒經自得非多學、詩律傷嚴近寡恩（酒經は自ら得しむも學ぶこと多きに非ず、詩律は傷だ嚴にして恩寡きに近し）——とある。大意は、『酒經』は読んで楽しめるけれども、学ぶこ

とは多くない。詩の規律はとても厳しくて、ほとんど情け容赦がない」というもの。「余亦云」とは、おそらく、この詩の二句目を踏まえていよう。ただし、文淵閣四庫全書本『眉山集』卷十所収のものは、二句目の「傷嚴」を「深嚴」に作る。

※皎然：中唐の頃に活躍した詩僧。姓は謝、字は清昼。南朝宋・謝靈運の十世の孫と言われる。古今の詩について評論した『詩式』や『詩評』などを著した。

※「御溝詩」：ここでは、ある僧侶が皎然の許を訪れ、皎然に示した詩とされているが、南宋・計有功の『唐詩紀事』卷六十七

「王貞白」には、晩唐・王貞白が詩僧の貫休に示した五言律詩として、八句すべてが挙げられている。【備考】を参照。

※要當：「かならず」というの意の口語的表現。『近思錄』卷七に、

——有志於道者、要當去此心而後可與語也（道に志す者有れば、要當かならず此の心を去りて後に與に語るべきなり）——とあり、『朱子語類』卷一一四に、——懸蝨於戸、視之三年、大如車輪。……雖實無這事、要當如此、所見方精（蝨を戸に懸けて、之れを視ること三年、大なること車輪の如し。……實に這この事無しと雖も、要當かならず此くの如くんば、見る所方めて精し）——とある。

【通釈】

詩をつくるうえで大事なことは、人とよく相談し、欠点を徹底的に見つけたし、それを取り除くことである。たとい一字でも、いかげんに投げやってしまったてはいけない。その姿勢は、ほとんど細かい規律を人々に強いる法家のありように近く、とても「恕（思いやり）」を重んじる儒家のありようとは言い難い。それゆえこれを詩律と言うのである。蘇軾は「思い切つて厳しい規則の詩によつて戦いに挑みたい」と言う。私もまた「詩の規律はとても厳しくて、ほとんど情け容赦がない」と言ったことがある。おおよそ詩を作ろうと思ひ立つた初めの頃には、必ず困難と安易の二つの道に出くわす。学ぶ者は自分の苦手なことを努め行うことはできないもので、しばしば困難な道を捨てて安易な道に進もうとする。文章というものは、上手く作れることがめつたにないので、つねにこのような過ちに陥ってしまうのだ。詩を作るには自ずと落ち着きのよい字がある。ただそれを得たいと思うものの、まだ思い至らないだけなのだ。

皎然は、詩によつて唐代に名を馳せた人である。あるとき僧侶が自作の詩を袖に入れ皎然に面会を求めにやつて来た。

皎然は彼の「御溝の詩」を指さして『この波は聖なる天子様の恩沢で充ち満ちている』という句は、「波」の字がなお落ち着かない、改めるべきだ」と言った。僧侶は憤りの表情を顔に出して帰つていった。この僧侶も詩を作ることが出来る人であつた。皎然は帰つてもまたやつて来るだろうと思ひ、そこで筆を手に取り手のひらに「中」の一字を書いて、その手を握つて待つた。僧侶は果たしてまた戻つてきて、「中」の字に改めようと思うが、どうだろうか、と言つた。皎然は手を開いて手のひらに書いた字を見せ、かくして二人は交流を結んだのであつた。詩を作るには必ずこのようにしてこそ、はじめて正しい姿勢と言へるのだ。

【備考】

『唐子西文録』では、「御溝詩」をめぐるのやりとりを、皎然とある僧侶との逸話として伝えるが、南宋・計有功の『唐詩紀事』巻六十七「王貞白」、および元・辛文房の『唐才子伝』巻十「王貞白」は、いずれも「御溝詩」を王貞白の詩とし、貫休と王貞白との逸話として伝える。また、『唐詩紀事』には、「御溝詩」のすべての句が挙げられている。これにより、この詩が以下の通り、五言律詩であることが確認される。

一派御溝水 一派 御溝の水

緑槐相蔭清 緑槐 相ひ蔭清たり

此中涵帝澤 此の中 帝澤を涵す

無處濯塵纒 處として塵纒を濯ふ無し

鳥道來雖險 鳥道 來たれば險なりと雖も

龍池到自平 龍池 到れば自ら平らかなり

朝宗心本切 朝宗 心は本とより切なり

願向急流傾 願はくは急流に向ひて傾かんことを

大意は、——ひとずじの宮中のお堀の水。堀端には槐樹が連なり、緑の木陰がすがすがしい。お堀の水は天子様の恩沢に満ちており、冠の塵を洗って隠者になろうとしても、そのような水はどこにもない。世を捨てて山に登れば道は険しいが、龍池のある天子様の宮殿にやってくれば、土地も自ずと平坦になる。天子様に拝謁したいという思いはもともと深かったのだ。谷川の急流に乗って山からおりて、天子様の許へ馳せ参じたいものだ。——というもの。

なぜ、「波」の字を「中」の字に改めたのか。その理由について、

この逸話は詳しくは語らないが、一つの手がかりとして、当該句が対句を原則とする頷聯に含まれるものであることが挙げられよう。一字目の「此」と「無」の対応がややゆるやかではあるが、二字目につい

ては、「處」の字との対句における対応関係から見れば、「波」の字よりも、同じく場所に関する「中」の字の方がよりふさわしいことは確かであろう。

(人文学専攻中国文学専門 博士課程後期課程一年 大島絵莉香)

〔付記〕

本稿は、二〇一二年度に実施した名古屋大学文学部「中国文学

特殊研究（詩話を読む）」における成果である。担当者の発表原

稿・資料をもとに、大島と矢田がそれらを整理し修正を加えた。

担当者の所属・学年は二〇一二年度当時のものである。

本稿では、全三十五条のうちの第十六条までを掲載した。第十

七条以降については、二〇一三年度の授業において読み、その成

果を次号以降に掲載する予定である。